

足尾銅山見学会

草木ダム・渡良瀬川上流を訪ねる



渡良瀬川は、かつて太日川(ふといかわ)と呼ばれ、足利市の対岸から矢場川を通り、古河市の西部で合ノ川という川に連なり、現在の江戸川の川筋を通して、東京湾に直接注いでいました。

江戸時代、徳川家康は埼玉平野の開発、舟運による東北地方との経済交流、江戸を守るための外堀を作るといった目的で、利根川の川筋を渡良瀬川、毛野川(鬼怒川)、常陸利根川と合流させながら、東の方へと変えていく工事を伊那忠次に命じました。これを東遷(とうせん)といい、伊那家は三代をかけてこの大事業に取り組みました。

1594(文禄3)年頃には、利根川の水を放水するために、逆川と島川が設けられ、1621(元和7)年頃には、利根川と太日川を直結させる工事が行われました。これにより太日川(渡良瀬川)は、利根川最大の支流となったのです。しかし、渡良瀬川も利根川も、洪水が起こった場合、昔の河道に沿って東京湾に流れてきます。東京の住民にも大きくかかわる河川です。この渡良瀬川の上流域での治水対策・草木ダム、更に上流の足尾銅山を訪ねます。

※コロナ対策で募集人数を通常の50%にしておりますので、今回のコースを2日間実施します。
どちらかご都合の良い日をご予約下さい。

コロナ過ですのでワクチン接種終了を条件にさせていただきます。

開催日時：令和3年9月23日(木)・26日(日) 午前8:00集合・出発

集合場所：JR新小岩駅 東北広場(裏面案内図参照)

参加費用：1,000円(資料、交通費の一部として)

募集人数：25名(先着順)メール eizoutoshikeikaku@gmail.com 携帯080-4006-8819

参加条件：ワクチン接種を2回完了している方で、2回目の接種後4週間経過している方。

行	程	8:00	JR新小岩駅東北広場 出発(集合次第出発します。)
		11:00	道の駅やまびこ 到着 お土産購入(産直野菜など)
		12:00	草木ダム 到着
		13:40	銅親水公園(足尾銅山) 到着
		18:00	JR新小岩駅 東北広場 到着予定(道路状況により流動的です。)

※当日は、次のことに関してご理解、ご協力をお願いします。

- ・マスク着用をお願いします。
- ・乗車中は飲食を禁止します。水分補給はストローなどを使用し、マスクを取らずに飲める工夫をお願いします。
- ・昼食は、ご持参いただき野外での飲食をお願いします。
- ・コロナ禍での開催で、参加募集人数を少なくしております。

主催 市民防災まちづくり塾実行委員会・関東地域づくり協会

草木ダム

草木ダム（くさきダム）は、群馬県みどり市東町座間、一級河川・利根川水系渡良瀬川の本川上流部に建設されたダムである。旧名は神戸ダム（ごうどダム）。独立行政法人水資源機構が管理する多目的ダムで、東京都を始めとする首都圏への利水と渡良瀬川・利根川の治水を目的とした利根川水系8ダムの一つである。高さ140.0mの重力式コンクリートダムであり、利根川水系では川治ダム（鬼怒川）と並んで奈良俣ダム（櫛俣川）の158.0mに次いで高い。



足尾銅山

初期：足尾銅山は旧足尾町（現日光市）備前楯山を中心に発展した日本有数の銅山。江戸時代は幕府の直営で、明治に入ってからは政府の経営となったが、1871年（明治4年）民営に移され、足尾銅山は旧足尾町（現日光市）備前楯山を中心に発展した日本有数の銅山。1871年（明治4年）民営に移され、1877年（明治10年）古河市兵衛の経営となった。

最盛期：明治中頃からは鉱山の近代化も進み、1887年（明治20年）には本山に火力発電所が建設された。その後も大規模な資本の投下による機械化が進み、1888年から1897年まで（明治21年から30年まで）には日本全国の銅の生産の40%近くを生産するまでに

至った。一方、生産のみを追及した施設増強の結果、煙害は周囲の山々を禿げ山と化し、流出した排水は渡良瀬川下流域に甚大な被害をもたらした。

後期から閉山まで：第二次世界大戦が勃発すると、銅山は無計画に乱掘されるようになった。これにより資源は急速に枯渇し、また施設の老朽化もこれに追い打ちをかけ、1973年（昭和48年）銅山はついに閉山を余儀なくされた。現在は、山々に昔の緑を取り戻すための施策が着々と実を結びつつある。

足尾鉱毒事件・田中正造・渡良瀬遊水地

田中正造は、天保12年（1841）11月佐野市小中町で生まれ、栃木新聞（現・下野新聞）編集長を経て、県会議員となった。明治23年（1890）第1回総選挙で衆議院議員に選ばれ、渡良瀬川の魚や農作物に大きな被害を与えていた足尾銅山の鉱毒問題を国会で取り上げ、渡良瀬川沿いの人々を救うため努力した。その結果、足尾鉱毒事件は社会問題にまで広まった、**日本初の公害事件**である。明治34年（1901）には議員を辞職し、天皇に直訴した。その後、谷中村の遊水地化への抗議など足尾鉱毒問題などに取り組んだが、大正2年（1913）9月、72歳でその生涯を閉じた。

明治23年、29年の洪水を契機に、渡良瀬川下流部の洪水被害とともに、足尾銅山から渡良瀬川に流れ出した鉱毒による被害は明確になった。これに対し、渡良瀬川の改修や最下流部に遊水地計画が打ち出され、当時、渡良瀬川は栃木県管理であり、明治37年県議会可決後、明治38年から明治40年までの間に930町歩余りが買収された。その間、明治39年（1906）には谷中村は藤岡町に合併廃村となった。明治43年には、内務省による改修事業が始まり、昭和5年には**渡良瀬遊水地**が完成した。その後、昭和10年、13年、22年と相次ぐ大洪水を契機に渡良瀬遊水地を、より効果的に活用するために、渡良瀬川、思川、巴波川に沿って、新しく囲繞堤や越流堤を設け、調節池化を図り、大きな洪水の時だけ調節池の中に川の水が入るようにし、従来より洪水調節機能を増大させる事業（調節池化事業）を実施した。谷中村は、渡良瀬川、思川、巴波川に挟まれた沼地や湿地が広がる地域に位置し、3つの村が合併して、明治22年（1889）に誕生した村で、周辺に比べて地盤高は低い水害を受けやすく、村の周囲には囲堤が築かれていた。谷中村や周辺の村では、各家で洪水に備えて『水塚』や『揚舟』などがあった。村では、水田、畑作を行うほか、周りには多くの池沼や水路があり、魚捕りや湿地の植物ヨシ、スゲを使ったヨシズ、スゲ笠作り、養蚕業なども行われていた。明治20年代になって、渡良瀬川最上流部に位置する、足尾銅山より流出する鉱毒が渡良瀬川沿岸に広がり、大きな問題となった。その中に谷中村もあった。この足尾鉱毒被害の防止対策の一つとして、氾濫被害の軽減のため渡良瀬川下流部に遊水地を造る計画が打ち出された。その計画が、谷中村を中心とした地域で明治38年（1905）から栃木県が買収を始め、村人達は反対したが、明治39年（1906）に谷中村は藤岡町（現・栃木市）に合併され廃村となった。

新小岩駅東北広場案内図



集合場所

JR新小岩駅北口から北口連絡通路を渡って、ロータリー広場にお集まりください。

